

ネオ狂言「ポルチーニ」にみる 温故知新の取組

昨年7月、岡山Teijinの能舞台、12月国立能楽堂に続き、本年1月、大槻能楽堂にて小笠原由桐作・演出・主演ネオ狂言「ポルチーニ」が、作品モチーフである狂言「茸(くさびら)」と同時に演じられた。小笠原師は多くの新作狂言を手掛けていくが、今回の「ポルチーニ」は狂言の様式を超えており、「ネオ(新たな)狂言」と表現したものと思われる。狂言成立の歴史は定かではないが、今年のNHK大河ドラマで取り上げられる平安時代に書かれた「新猿楽記」には京で演じられた芸能の「さるがく」として、滑稽な物真似芸等がみられ、その様な雑技芸能が元となり、南北朝時代には狂言の原型が成立したと言われている。以来650年、狂言は途絶える事なく様



「新作狂言「ポルチーニ」(撮/新宮夕海)

式性は磨かれてきた。小笠原師は狂言の源流を探る事をライフワークとし、「新猿楽記」研究を行うと共に(その内容は小笠原師のホームページ参照)、ロームシアター京都や平安神宮庭園等で、平安時代の「さるがく」型式を再現する公演を行ってきた。今回のネオ狂言もその延長とも言えるが、「さるがく」も当時の世相を皮肉り笑い飛ばすような内容であった様で、今回演じた「ポルチーニ」も現代社会の矛盾を痛烈に風刺する喜劇として軽妙に演じられている。それは狂言の様式性にとらわれないが、演出・演技は狂言師として習得したものである。

狂言「茸」は庭にはびこる奇妙な多数の茸を祈禱により山伏に取り除くように依頼するが、祈れば祈るほど茸が増えて山伏を襲うという山伏狂言特有の内容だが、ネオ狂言では狂言「茸」を下敷きにして、漫画家・赤塚不二夫のマンガ人気キャラクター達を登場させている。彼が主演する万能科学者「イヤミ博士」がバカボンのパパに頼まれて、「ポルチーニ」即ちイタリア語の茸キノコの駆除を試みるが大失敗するという筋書きに創られている。科学万能の現代文明社会が開発による自然破壊を進め、自然からの逆襲を受ける事を風刺する内容が込められている。

先に述べた通り、狂言の源流芸能には当時の世相への風刺の笑いが込められていたものと思われるが、様式化が進んだ現代狂言では社会的風刺を前面に感じる事は少ない、むしろ和楽の世界や人間肯定の普遍的笑いが狂言の本質となっていると言えよう。しかし、狂言を観る者が時には風刺をその中に見ることも楽しむのの一つである。小生が学生時代に初めて狂言「茸」を観た頃、ベトナム反戦運動が米国の若者達の間で盛り上がりつつあったが、次々出現するキノコをベトナムに見立てる観客が多かったことを思い出す。ところで、昨年5月、小笠原師は日越国交樹立50周年記念に招かれ、ベトナムで狂言「茸」を現地役者たちを指導し共演した。三万人を超える観客の中で、

当時のことを思ったのは小生だけだったかも知れない。昨年コロナ感染症が5類となり、ようやく能楽堂へ観客が戻ってきたが、今回の「ポルチーニ」を観て、文明社会の開発が自然を破壊し発展してきた歴史の中で、自然の逆襲としてコロナウィー

ルスが変異を繰り返して人間社会を襲ってきたことを、10年以上のキャリアを持つ山伏・大先達修験者でもある小笠原師は意図しているのではないかとと思われる。地球温暖化が進めば科学の力だけで果たして人類は生き延びることができるのだろうか、という哲学的な問題提起を「ポルチーニ」に小生は感じる。

『ネオ狂言』とは、洗練される以前の、エネルギーを再現実しようとする、新たな試みの狂言を指している。

小笠原師が2011年に京都国民文化祭で京都国際マンガミュージアムの依頼を受けて、世界遺産・二条城で「ネオ狂言×マンガ×仮面劇×赤塚不二夫の世界」と題したイタリア仮面劇コンメンディアラテ様式による「ポルチーニ」の初演を観たが、翌年から三年間、桃山大学との共同研究「中近世の日本とイタリアにおける仮面喜劇の生成発展と現代的実践について」の活動を通じて、イタリア人のコンメンディアラテ役者と「狂言アデルテ役者」と「狂言の起源を探る」をテーマに共演を重ね、ベネツィア大学での研究成果を発表するなど、小笠原師は今回の公演のベースとなる研鑽を積んでき

た。また、小笠原師は中世民間仮面の研究者、乾武俊氏(故人、「能面以訛」著者)と親交があり、仮面研究にも造詣が深かったが、コロナ禍で舞台に立つことができなくなつた三年間、自身で狂言面・能面を彫ることに没頭し、今回の「ポルチーニ」では自作の仮面を使って演出している。国内にとどまらずパリやハノイなどで自作面の展示会を開き好評を博している。狂言師と仮面作家の二刀流を彼は自称している。

『ネオ狂言』は、従来の狂言の技法を使いながら、さまざまなジャンルとのコラボレーションを演じることで再構築しようとしている。

狂言の面の種類は少ないが、『ネオ狂言』では、新作の面も使つていくと、催主の小笠原由桐氏自身が製作した面を使っている。

既に延年プロジェクトや「コンメンディアラテ」の様式で上演するなどの取り組みをしていて、今後も新しい道を切り開いて行くことになりそうだ。

小笠原師は狂言師の家に生まれた者ではなく、若くして和泉流狂言、野村萬師の門を叩き狂言師となった。それだけに、狂言を演じるだけでなく狂言研究を深めるために、研鑽を重ね独自の活動を続けている。そのことにより国内のみならずフランスを始め国際的にも活動を広げ評価され、多数の公演や海外の演技者の狂言技法による指導などを行ってきた。そのエネルギーの源として現状に甘んじることなく、

本年8月25日(日)、ネオ狂言会第三弾が国立能楽堂にて本作品を更なるバージョンアップし再演される。常に探求心旺盛な姿勢にて狂言の源流を探る「ネオ狂言会」に拍手喝采を送るものである。

『ネオ狂言』は、洗練される以前の、エネルギーを再現実しようとする、新たな試みの狂言を指している。

『ネオ狂言』とは、洗練される以前の、エネルギーを再現実しようとする、新たな試みの狂言を指している。

『ネオ狂言』とは、洗練される以前の、エネルギーを再現実しようとする、新たな試みの狂言を指している。

『ネオ狂言』とは、洗練される以前の、エネルギーを再現実しようとする、新たな試みの狂言を指している。

『ネオ狂言』とは、洗練される以前の、エネルギーを再現実しようとする、新たな試みの狂言を指している。

『ネオ狂言』とは、洗練される以前の、エネルギーを再現実しようとする、新たな試みの狂言を指している。

『ネオ狂言』とは、洗練される以前の、エネルギーを再現実しようとする、新たな試みの狂言を指している。

『ネオ狂言』とは、洗練される以前の、エネルギーを再現実しようとする、新たな試みの狂言を指している。

『ネオ狂言』とは、洗練される以前の、エネルギーを再現実しようとする、新たな試みの狂言を指している。

『ネオ狂言』とは、洗練される以前の、エネルギーを再現実しようとする、新たな試みの狂言を指している。

(是枝義維/早稲田大学狂言研究会OB)